



熊谷市 記者クラブ取材情報

平成29年 6月27日発表
担当課: 江南文化財センター

事業の名称等

妻沼聖天山本殿「歓喜院聖天堂」国宝指定5周年記念
特別展「妻沼聖天山の絵馬展」の開催について

1. 日時 7月15日(土)～8月20日(日) 午前9時～午後5時 (休館日: 月曜日・祝日)

2. 場所 妻沼展示館大展示室 (熊谷市妻沼東一丁目1番地)

3. 事業概要

妻沼聖天山は本殿で国宝の「歓喜院聖天堂」などに寄進された絵馬や奉納額を保管しています。これらの作品は妻沼聖天山の歴史を今に伝える歴史資料であるとともに、建造物の保存などに多くの想いを寄せた先人たちの歴史を明らかにするものです。このたび、「歓喜院聖天堂」の国宝指定5周年を記念し、現在まで一般公開されることが少なかった絵馬と奉納額を特別に展示します。一級の美術品として、熊谷の歴史を彩る文化遺産として価値のあるこれらの作品群を目にすることができる貴重な機会となります。

会期: 7月15日(土)～8月20日(日) 9時～17時 (休館日: 月曜日・祝日)

会場: 妻沼展示館大展示室 (熊谷市妻沼東一丁目1番地、妻沼中央公民館西側)

観覧無料

主催: 熊谷市教育委員会 協力: 妻沼聖天山

(特別観覧会) 日時 7月29日(土) 14時～15時30分

会場 妻沼展示館大展示室 (同上)

内容 解説会「妻沼聖天山の絵馬群と信仰の歴史」14時～

(熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹)

演奏会「祈りの響き」(ヴァイオリンとピアノ) 15時～

4. 特徴やPRポイント

展示では、横4メートル、縦1.5メートルを超える大規模の絵馬や、細微な彫刻などが彫られた奉納額、小型の奉納絵馬など、合計約45点の展示を予定しています。今回、妻沼聖天山の協力を得て、初めての一般公開となる作品も含まれます。

今回展示する絵馬・奉納額は、歓喜院聖天堂の軒下などに掲げられていましたが、平成15年から22年にかけて実施された保存修理工事の際に取り下げられた後、境内で保管され非公開となっていました。平成29年5月、これらの作品群を妻沼展示館に移動し、クリーニング、調査、撮影などを進めました。その調査に基づいた解説を含む図録リーフレットを会場で配布します(2,000部作成、無料)。

5. その他

絵馬の中には、熊谷とゆかりのある奥原晴湖をはじめ、地域を代表する画家や書家の作品が確認されています。なお、今回に調査によって、絵馬と奉納額の額縁に施された彫刻のうち約5点には、「歓喜院聖天堂」の彫刻を担当した石原吟八郎の流れをくむ石原系の彫物師が手掛けた作品があることが判明しました。

※ 資料の有無(有 ・ 無) 概要資料

担当者 熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任 (江南文化財センター) 山下祐樹

連絡先 電話 048-536-5062 画像等連絡用: c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

妻沼聖天山の

妻沼聖天山本殿「歓喜院聖天堂」 国宝指定五周年記念 特別展



妻沼聖天山は本殿「歓喜院聖天堂」などに寄進された絵馬や奉納額を保管しています。これらの作品は妻沼聖天山の歴史を今に伝える歴史資料であるとともに、多くの信仰を集め、建造物の保存などに多くの想いを寄せた人々の歴史を明らかにするものです。

このたび、「歓喜院聖天堂」の国宝指定5周年を記念し、現在まで一般公開されることが少なかった絵馬と奉納額を特別に展示します。一級的美術品として、熊谷の歴史を彩る文化遺産として、この機会にぜひご覧ください。

会期

7月15日[土]

8月20日[日]

9:00~17:00 休館日 月曜日・祝日

会場

妻沼展示館大展示室

住所 熊谷市妻沼東一丁目1番地

入場無料

特別観覧会

7月29日[土] 14:00~15:30
妻沼展示館大展示室

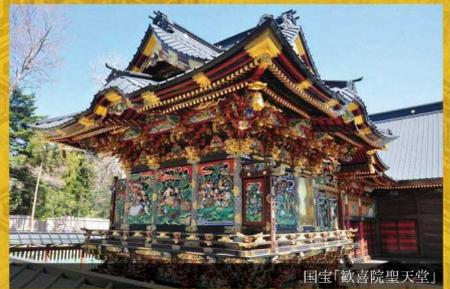
※絵馬の解説などを予定しています。

入場無料



お問い合わせ 熊谷市立江南文化財センター ☎048-536-5062

絵馬展



国宝「歓喜院聖天堂」

平成24年(2012年)7月9日、妻沼聖天山本殿「歓喜院聖天堂」が正式に国宝として指定され、埼玉県内初の国宝建造物となりました。「歓喜院聖天堂」は、享保20年(1735年)から宝暦10年(1760年)に掛けて、林兵庫正清及び正信らによって建立されました。これまで知られていた彫刻技術の高さに加え、修理の過程で明らかになった漆の使い分けなどの高度な技術が駆使された近世装飾建築の頂点をなす建物であること、またそのような建物の建設が民衆の力によって成し遂げられた点が、文化史上高い価値を有すると評価されました。日光東照宮の創建から百年あまり後、装飾建築の成熟期となった時代に、棟梁の統率の下、東照宮の修復にも参加した職人たちによって、優れた技術が惜みなくつぎ込まれた聖天堂は、「江戸時代建築の分水嶺」とも評価され、江戸後期装飾建築の代表例です。

特別展「妻沼聖天山の絵馬展」で展示される主な絵馬・奉納額 解説

『かんしん また韓信の股くぐり』

寸法：縦84cm×横176cm

概要：

元治元年（1864）3月1日、榛沢郡新戒村（現・深谷市新戒）の石川熊次郎業純を願主として奉納された額である。絵師の研香金壽による絵画と揮毫が残されている。5人登場する絵画は「韓信の股くぐり」を題材としている。登場する韓信は、漢の高祖に仕えた将軍で、張良・蕭何とともに漢の三傑と呼ばれた。韓信が若い頃、喧嘩を売られたが、大志を抱く身であったから争うことを避け、言われるまま股の下をくぐるという屈辱をあえて受けたが、その後において韓信は大成し、天下統一のために活躍したという故事が本画の由来となっている。そこには、将来に大望のある者は、目の前の小さな悔いを忍ぶべきという戒めが示されている。

絵師の研香金壽は上毛画壇の一人であり、上州島村（現・伊勢崎市境島村）の豪農・画家の金井鳥洲（1796-1857）の末弟として知られる。人々の生き生きとした姿と表情が絵馬全体に満ちている。額縁は飾り銅板を各所に配置し、縁の内側に赤色の装飾を施すなど、意匠性を高めている。



『かわなかじまがっせん川中島合戦』

寸法：縦144cm×横217cm

概要：

安政3年（1856）4月、谷川屋連中によって奉納された額である。絵画と書揮毫者は、岩崎栄益門人の代表的な絵師である岩崎栄昌が担当した。岩崎栄昌は、江戸末期に妻沼を中心に活躍した画家であり、新田岩松家の御用絵師であった飯塚村岩崎栄益の門人として知られる。絵の主題は「川中島合戦」である。永禄4年（1561）9月10日早朝に信州善光寺平の川中島で、甲斐武田信玄と越後上杉謙信が交戦した際の、馬に乗った謙信と地上で軍配により防御する信玄の代表的な構図が描かれている。勢いよく討ち込む姿は猛々しく、赤彩色の強さも全体的な躍動感に結び付いている。額縁の構造は「甲丸（蒲鉾型）」であり、四隅各所に飾り銅板による装飾が見られる。



かんぎてん やまおかてつしゅう しよ
『歎喜天』(山岡鉄舟)書

寸法：縦84cm×横176cm

概要：

明治14年(1881)11月に奉納された額で、奉納者は「山岡鉄太郎」(山岡鉄舟・宮内少輔正五位)と記されている。書揮毫者についても山岡鉄太郎である。山岡鉄舟(山岡鉄太郎)は、



幕末に妻沼の地を訪れており、歎喜院には「明治14年宮内省侍従官」として額を納めている。鉄舟独特の書法が生かされ、雄揮な草書体で「歎喜天」と書かれている。

山岡鉄舟(1836-1888)は、幕末から明治時代の幕臣、政治家、思想家であり、剣・禅・書の達人としても知られている。山岡鉄舟を含む勝海舟と高橋泥舟は文武に秀でた「幕末の三舟」と称されている。額縁は「中甲丸」と呼ばれる構造であり、中央の「歎喜天」の銅板貼りに施された金色彩色の光沢が目に見える。

けいらざん
『鷄羅山』

寸法：縦80cm×横60cm

概要：

明治10年(1877)6月に奉納された絵馬額であり、東海晴湖(奥原晴湖)によって揮毫された。奉納者は「木崎駅 願主 齋藤惣四郎寿題」として記されている。昇り龍による彫刻が特徴の額縁構造となっている。規模は小型でありながら、精緻な彫刻が額縁に施されている。奥原晴湖の独特の揮毫と、肉彫り彫刻の技芸が生かされた芸術性の高い絵馬であると言える。



題字となる「鷄羅山(けいらせん)」は、カイルラス山(Kailash/Kailas)と呼ばれるチベット高原西部に位置する独立峰(標高6,656m)で、歎喜天の原郷とする伝説も残されている。歎喜天がこの地に眷族(けんぞく)を率いて住み、仏法僧の三宝(経典、僧侶、舍利)を守護するとされている。

奥原清湖(東海晴湖)(1837-1913)は、幕末から明治期の画家。野口小蘗とともに明治の女流南画家の双璧といわれ、また安田老山と関東南画壇の人気を二分したとされる。上川上村(現・熊谷市上川上)に居を構え、画室を「繡水草堂」「繡佛草堂」「寸馬豆人楼」などと称して作品を発表した。その画風には豪快さが見られ、晩年は非常に鮮やかで色彩豊か、細密な筆致によって独特の南画世界を築いた。

かんぎてん
『歡喜天』

寸法：縦122cm×横192cm

概要：

明治45年（1912）4月に奉納された額で銅板貼りに金色が施された「歡喜天」が力強く置かれている。奉納者は「東京美術画会 会主 田部井文吉 同長女 千代子」である。書の揮毫は「志村房之」が担当している。額縁は「甲丸（蒲鉾型）」の構造



であり、四辺に飾り銅板がはめ込まれている。左側縦の縁枠には東京下谷の電話番号が記されている。東京美術画会は、東京を中心に活動していた画家及び美術愛好者が所属し、画会の開催、美術品の啓発、流通などに一定の役割を果たした同盟団体であったとされている。

そうとく こうぎょう
『崇徳而廣業』

寸法：縦138cm×横245cm

概要：

元治2（丑）年（1865）晩春吉祥旦、歡喜院聖天堂に奉納され、奉納者として46人の氏名が記載されている。額縁を形作る彫刻は「雲龍」を主題として、肉彫りなどの高度な技法が用いられ、紅色の弁柄彩色が各所に施されている。奉納者名とともに上州花輪村（現・群馬県みどり市）などの地名が書かれており、その中には「石原」などの名があることから、歡喜院聖天堂の彫刻を担った上州花輪村周辺の彫物師集団との関わりを推察することができる。それは四方を覆う彫刻技術の高さからもうかがい知れよう。中央上部に記された「崇徳而廣業（そうとくこうぎょう）」とは、「徳を崇め業を廣む。（人に役立つことを大切にして仕事をすれば、おのずと事業も拡大する）」との意



である。修練された筆の運びで、金色の輝きとともに強い印象を与える奉納額である。

ほうのう しちふくじんず
『奉納 七福神図』

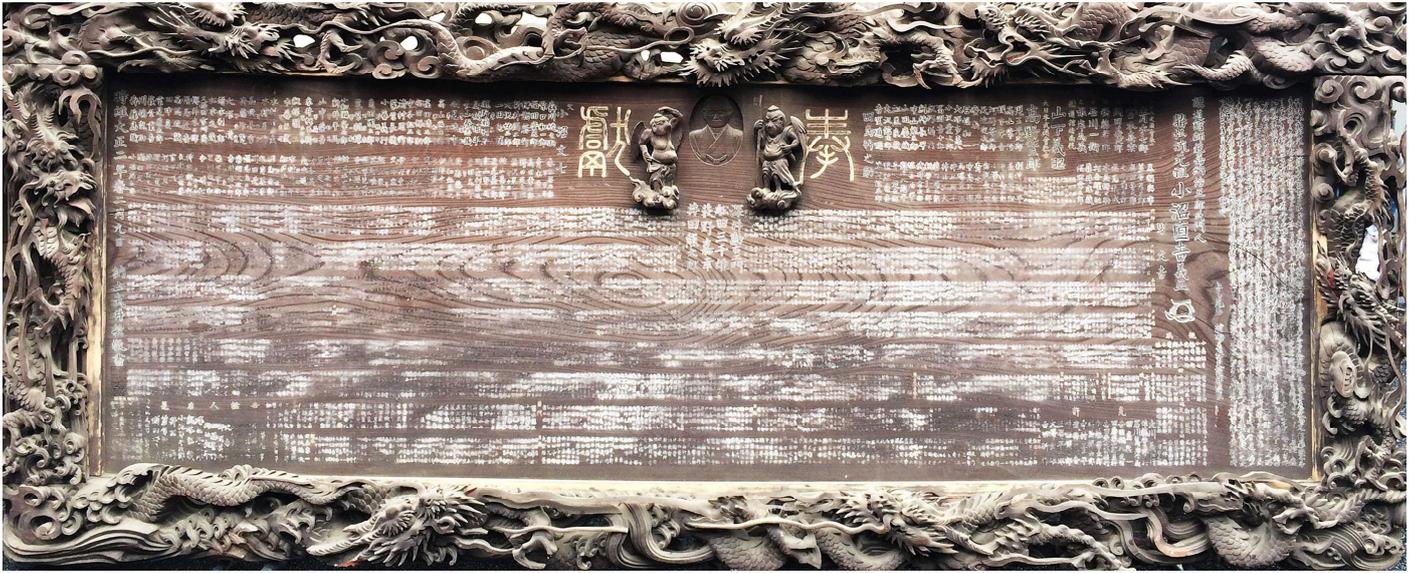
寸法：縦120cm×横178cm

概要：

明治27年（1894）6月15日、栃木県下都賀郡部屋村（現・栃木県栃木市藤岡町）の大島秀蔵を願主として奉納した絵馬である。七福神が描かれている。左下の枠内には奉納の理由について記されている。大島氏は目の治療に際して、自分一人の力による全治は難しいことから、歡喜院に祈願に訪れ、第一に神の助力を受けること、第二に服薬すべきとの進言を受けた。そして、その御利益を預かり治癒したことから感謝の意を込めて奉納したと記されている。画面には七福神のユーモラスな表情が描かれ、喜びに満ちた雰囲気が感じられる。額縁には飾り銅板による細工が見られる。



ぶげい
『武芸 鼎弘流柔術創始小沼直吉』



寸法：縦181cm×横435cm

概要：

大正2年（1913）2月9日、下増田村（現・熊谷市下増田）の小沼直吉を奉納者として、書を武井敏敬が、由緒書を金井貢が担当した。歓喜院聖天堂に奉納された最大の奉納額である。額縁は四方彫刻で、上枠は一对の龍、右枠は昇り龍、左枠は下り龍、下枠は唐獅子一对を配して、豪壮で重量感に溢れている。彫刻は熊谷玉井の小林栄吉。額面中央に小沼直吉の肖像を陽刻し、左右に雲に乗る烏天狗一对を配し、額架けには彫刻の唐獅子一对が置かれている。本額の設計は、妻沼宿門前の田島佐市が担った。奉納者の連名では、講道館指南役柔道山下義昭、大日本武徳会教士の剣道高野佐三郎の名が確認できるほか、深井勘右エ門、船田三千雄（起倒流柔術免許皆伝）などの強豪の名が続いており、千人を超える寄進者名が連ねられている。

主たる奉納者である小沼直吉は、鼎弘流乱内股の柔術を考案し、妻沼聖天山に願をかけて世に広く小沼流として喧伝された武術者である。由緒書を記した金井貢（号は雄洲）は、明治期の衆議院議員で、大日本武徳会の要職を歴任した能書家として知られている。出生地は妻沼原井村（現・熊谷市原井）の井上宗家で、上州尾島村（現・群馬県太田市尾島町）の金井家に養子となった。

額縁を囲む彫刻技巧の高さは、奉納額の左下に記された彫物師集団の名からも見て取れる。聖天堂など妻沼聖天山の建造物の建立で知られる林家を継いだ林正啓が職人を統括し、歓喜院平和の塔の建立で知られる林亥助も名を連ねた。彫刻師では関東一円で活躍した内山良雲や熊谷玉井村（現・熊谷市玉井）出身の彫物師で上州花輪村（現・群馬県みどり市）を発祥とする彫刻技術を継承した小林栄吉の名があり、貴重な作品であることが分かる。